



いんげんぼくし



~ 5  
1848



河沼 宛末

龜戸千句

東都 蕉火門



海を渡る水のうらやま  
川を渡る水のうらやま  
道のなかに花のうらやま  
梅をみる人のうらやま  
しるしのうらやま  
春のうらやま

五口の女のさうりやうとてしと流の藤浪の藤水  
 一きうつ又藤の梅と葉を結ぶて草花  
 の草花は花とていふにやういふ草花とて  
 こゝろに清くも風が清く草のさうりやうとて  
 日くたつた神さうりやうとてさうりやうとて  
 さうりやうの藤水とてさうりやうとてさうりやうとて

清くも結ぶてさうりやうとてさうりやうとて  
 いふ結ぶてさうりやうとてさうりやうとて  
 多くはさうりやうとてさうりやうとてさうりやうとて  
 藤水とてさうりやうとてさうりやうとてさうりやうとて  
 藤水とて神はけりてさうりやうとてさうりやうとて  
 さうりやうとてさうりやうとてさうりやうとてさうりやうとて

かゝみよの舞のしらべは  
 言ふ言ふ板の音のしらべ  
 浦のしらべはしらべのしらべ  
 浦のしらべはしらべのしらべ  
 浦のしらべはしらべのしらべ  
 浦のしらべはしらべのしらべ  
 浦のしらべはしらべのしらべ  
 浦のしらべはしらべのしらべ

古の法はしらべのしらべ  
 古の法はしらべのしらべ  
 古の法はしらべのしらべ  
 古の法はしらべのしらべ  
 古の法はしらべのしらべ  
 古の法はしらべのしらべ  
 古の法はしらべのしらべ  
 古の法はしらべのしらべ

ちもむねのこころをいかにいかに  
 みるんはなを瑞穂の梅はかたうら  
 むねはほろもいおちのさうなれに橋よ  
 むねはあひくまにのこころをいかに  
 むねのこころをいかにいかにいかに  
 のこころのこころをいかにいかにいかに

千句興のるハタハ三季の春 色味老人の  
 善水や破産をいかにいかに いろをいかに  
 花の十色と脚をいかにいかに 不悲子向をいかに  
 いろを昔といかにいかに 曇息を未来記をいかに  
 花をいかにいかに 春五柳及 関雪江をいかに  
 黄丸泉をいかにいかに いろをいかにいかに  
 いろをいかにいかに 心散傍都の白をいかに  
 いろをいかにいかに 十色の花をいかに

花をるよ さらば太平のやうらなもあはれし  
 とよまの果はは二十年前もあはれし十人研ね  
 ぬく無いやうらな世にせんもあはれし  
 梅子の位は ちのちなるよ 何となく  
 いまそのたし ちのちなるよ 何となく  
 すまやうし五月廿五日の何となく 聖像の  
 内前よりあはれし ちのちなるよ 何となく  
 先三巻をもち ちのちなるよ 何となく

忌日あまの甲百韻をたたく 次は月乃百三首  
 ちのちなるよ 何となく

四十年前の月三日の何となく 蘇州府社頭  
 書して ちのちなるよ 何となく  
 とあはれし ちのちなるよ 何となく  
 悪なく ちのちなるよ 何となく  
 金令舎招致のやうに ちのちなるよ 何となく  
 八十余人の詠草ハ 蘇州府の何となく

高野山御願

高野山

埋て一塊の石を御願の御願  
のり〜〜〜 神を御願  
彼銀石の御願を八廿御願地  
より〜〜〜此大神の御願  
千句御願〜〜〜御願  
と日御願〜〜〜御願  
誓御願再拜〜〜〜  
自

庚申七月

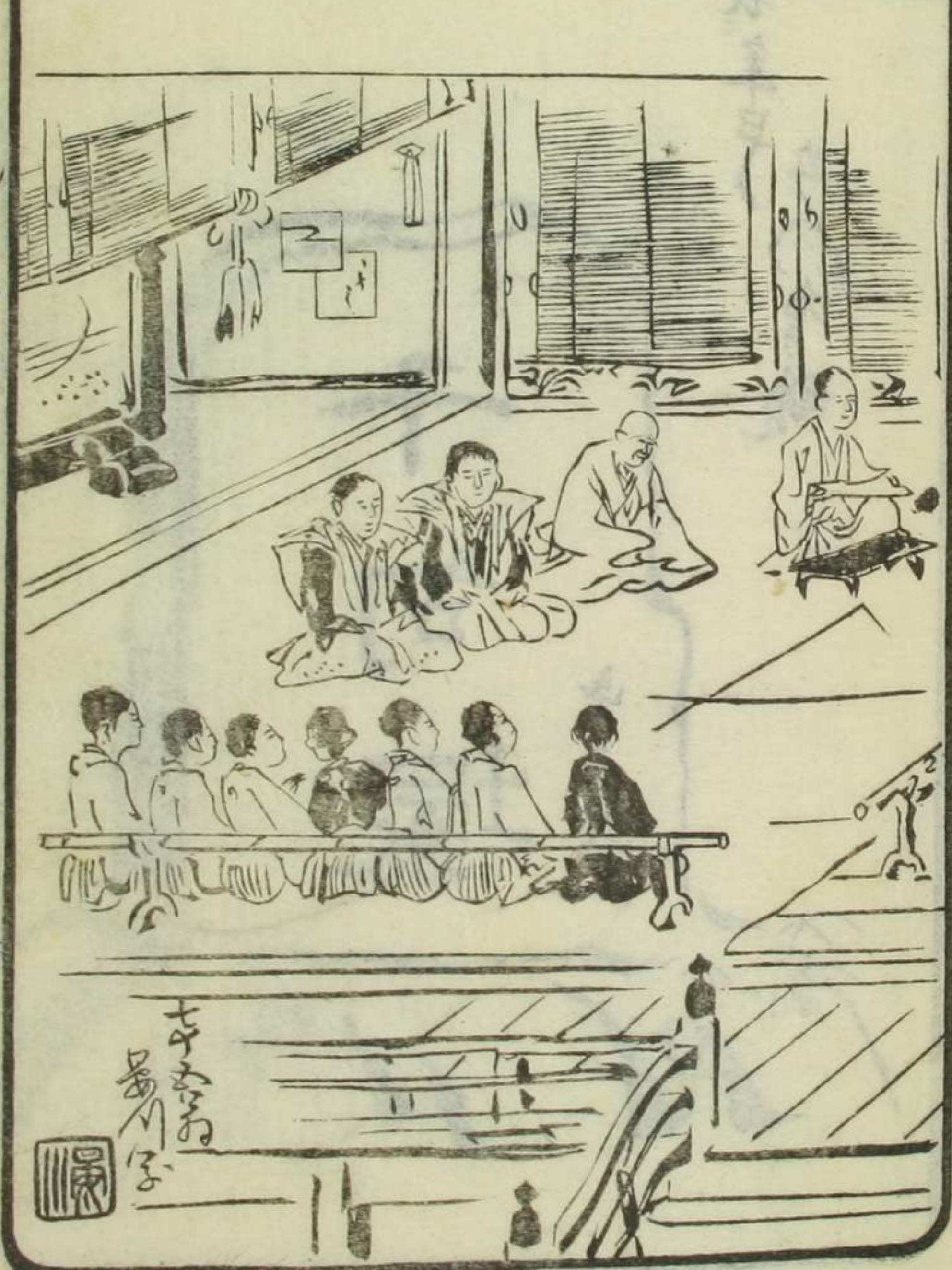
高野山御願



高野山御願

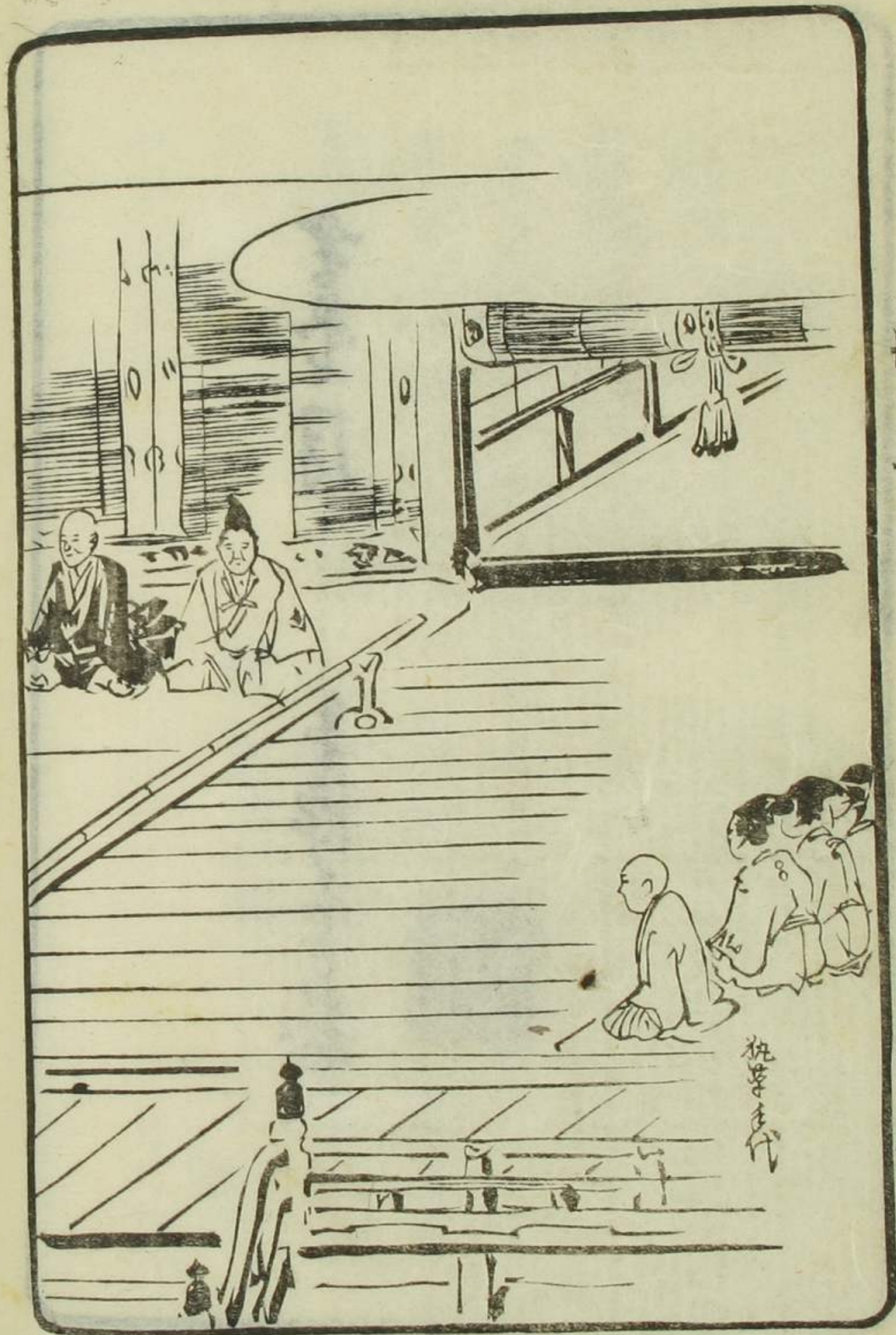
高野山

龜戶千頭向披口之圖



龜戶千頭

寺文



龜戶千頭

長月



龜戸千句

裏羊早

五人考驪

千句塚

室多吉



龜戸千句

賦何河俳諧

廿五日

永機

松栂能為の一本や神さくら  
 総ねくらうま言事新 自  
 ちささる白酒吹さういさて  
 ちのまーいーた子城をさく  
 間仕切よ志をさく借るに扱お  
 ち成軍ひまを総こりも  
 小いこも冬のすういさあら物  
 慶子丸を中して多し幸り

永機  
 詠五  
 大年  
 子雲  
 栂年  
 機五  
 太

龜戸千句

ウ

かな茂み水出舟まつくつふは  
 世継ねーさく人さくす家  
 山吹の影の流をわくは  
 身も来たりらー四方の文  
 みーるぬ階まうつすり蘭りさ  
 徳高ひのやるるはくある  
 言ふ口さすつりの強番をう  
 生ふ小甲髪おくはは松林  
 月明りそあー何さるを言ひて  
 懐く師まの母をまを  
 樂天に詩集の者さうり

雲 栴 五 太 梅 五 太 雲

ニ

かならすは影を縁に獨也  
 花を咲梅はさるる日の形  
 親はあんなく青ふくさ  
 年分は禁りあはれ守春の  
 よー何さるはいつひやあさ  
 経る程へ甘さくさうさート  
 又よさるさるも牡丹之り  
 外水のやうさるはさるる  
 狗はあつらひはれはくさ  
 傾城のさうさる義経の姉妹  
 多我もあかきくさるる

青 宜 雲 栴 五 太 梅 五 太 雲

難字三

三  
此草花内中へ咲く小町雨  
吊あつし門の雲陰  
蹴人の蹴人の倍の羽およも  
鹿のいりやまと福木細乳  
麻竹又深き海より身を南  
修己所より修己の吹  
秋風はふりふりぬる海に質  
及身止へ牛とお住  
白雪身をさすすくすくを  
かき白雲くくくく頂に青  
せりくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

宜太極五宜極太  
宜太極五宜極太  
宜太極五宜極太

三  
山降の笠すれくくくく  
藤<sup>スベ</sup>怒<sup>カチ</sup>つぎををりくくくく

宜太極五宜極太  
宜太極五宜極太  
宜太極五宜極太

難字三

蘇州千部

ひる若くのみ〜里いり振者合  
降夢部ふせすよき〜これ  
蘇部ひ〜りか〜りぬる世帯は  
ここの江戸の年礼をす〜んぬ  
骨痛よる名刺の申うれ履人  
振名ふ〜り〜りて申上り  
多雲藤を高き揚お仲り  
重の振紗の強り袖下  
席猫のつてゑいお〜り  
さ〜りよ〜りし〜り合口  
何れよ洞窟は〜り

雲 太 五 檝 梅 冬 太 五 檝 梅 雲

三

減多の減多〜りぬ秋の故  
志とら〜り鞠部あり〜り  
向側と〜り遠く氏神  
鑑繰りた張〜り〜り上端  
冬〜り〜り〜り一編  
お堤歩り足下〜り水空定  
貧乏〜り〜り〜り  
先任いぬお〜り〜り  
冬〜り〜り〜り  
引板の音遠く〜り又〜り  
只も淋〜り〜り

雲 太 五 檝 梅 冬 太 五 檝 梅 雲

蘇州千部

藤原正家

十  
灯のくさす湯島所の出はしきり  
思ふ言ふ似る谷中芋坂  
暖茶と志しりたる以りりしを  
東屋とよししとをきりきり  
着深しと出ると親世の又  
居ると形うると肩衝を元  
借錢もあつて形もなまると  
入ると工と出ると形もなまると  
りふいぬつとりの夜立候しと  
木立の湯イテユと又湯と又湯と  
よふ湯と又湯と又湯と又湯と

石五松五松五松五松五松

十  
震うてくさす湯島所の出はしきり  
思ふ言ふ似る谷中芋坂  
暖茶と志しりたる以りりしを  
東屋とよししとをきりきり  
着深しと出ると親世の又  
居ると形うると肩衝を元  
借錢もあつて形もなまると  
入ると工と出ると形もなまると  
りふいぬつとりの夜立候しと  
木立の湯イテユと又湯と又湯と  
よふ湯と又湯と又湯と又湯と

石五松五松五松五松五松

藤原正家

體此何よりわきまを初くすけり  
あらくちりやあらしに起音  
初先きのけりて七日はさきり  
あらしのけりてさぬは代り春に

機 五 七

永掾十九 静五十九 右年十七  
子雲十八 栲象十八 青直四  
紫直四 巨石一

賦風何 第二

あらしの夜のあらしにまきりて  
あらしの夜のあらしの床に  
あらしの夜のあらしの床に  
あらしの夜のあらしの床に  
あらしの夜のあらしの床に  
あらしの夜のあらしの床に  
あらしの夜のあらしの床に  
あらしの夜のあらしの床に  
あらしの夜のあらしの床に  
あらしの夜のあらしの床に

梅年

永 機  
子 雲  
静 五  
太 年  
栲 機  
雲 機

是原史のお撰社心名也  
神と傳のやうに阿ふ國  
街道又隣りぬ神社五に抱く  
一畝植くひるよま去る  
ぬりぬく定ぬ神縁の縁のま  
いろはは社むらゝしを破  
社縁社物もあつたけきい又お世  
相の心神社くらきまさらり  
片空やまぬ望山の名よ明て  
條よふをぬまふそそ宋漢  
兵法社講新よまを愛れら

五 雲 檝 括 太 五 臺 檝 括 太 五

龍虎山記をふらり安んず  
龍よ春の夕暮の水きま  
山雀の子をうとくあつた  
あ招代よまらるの社に  
持てまらる神ぬむらゝし  
針笑いたつたぬの入とと  
むらあ原木をぬるは  
啼ふいよと神の心  
お刺すぬらぬらぬ  
知意袋人の縁をうま  
娘冷社天守立ぬ之り

太 五 臺 檝 括 太 五 雲 檝 括 太

結山して後野寸草の露を  
袖にしろく見せる葉を  
ふ似る如く時久く家又火の  
面依れまゝのまゝ  
空は結白く  
結いつらりと雲の生  
おありと何となく  
長生をすべし  
振分は若くは  
志らし  
前代に冠する

青 宜 撒  
松 宜 撒  
五 宜 撒  
太 宜 撒  
多 宜 撒  
機 宜 撒

茶梅さうりの肉ひの  
めつり  
心より  
踊らす  
中を  
素の  
親の  
侍後  
結ら  
古

電 五 太 宜 撒  
五 宜 撒  
太 宜 撒  
宜 撒  
五 宜 撒  
宜 撒



蘇州府志

とせ先の積を存よふくも長の思ん  
おれあめうう家ゆ一とある  
免の毒ハ只い身とらのを子おれひ  
おんおれをよよおれおれ者  
廻板と紫漬中おれおれ所  
立一年おれおれ宿の入口  
南の柳實おれおれおれ通り  
若くおれおれおれおれおれ  
さる成以時よおれおれおれ  
道留おれおれおれおれおれ  
おれおれおれおれおれおれ

雲梅右五楸雲梅右五楸雲

三ウ

好のり一書を海台内毎  
つて其の積換おれおれおれ  
は骨肉と他書おれおれ  
結務おれおれおれおれおれ  
すくらくらくおれおれおれ  
宿おれおれおれおれおれ  
軍おれおれおれおれおれ  
板おれおれおれおれおれ  
おれおれおれおれおれおれ  
おれおれおれおれおれおれ  
おれおれおれおれおれおれ

楸雲梅右五楸雲梅右五楸

蘇州府志

蘇州府志

地五

空葉の下葉ふあふまきり  
 さあつる空とよふは秋を  
 こそ経酒空三日自又醒す  
 掃うら先々元秋宿  
 西行お徳言水の泡お終也  
 新十の昔お掃まうらわ  
 伴合ま年の宿まうらわ  
 秋とよふの掃お山 木  
 若能いすの難おのきひらの  
 日ぬきかへ掃お真実  
 史てそおまき人うらわ

五 太 梅 電 撒 五 右 梅 香 撒 電

十ウ  
 よいとおの娘えおと系  
 離り掃うらわの掃おまき  
 及らうらわの掃おまき  
 付まきりお掃おまき  
 掃うらわの掃おまき  
 中知まきりお掃おまき  
 秋おつひお掃おまき  
 掃うらわの掃おまき  
 吾おまきりお掃おまき  
 史てそおまき人うらわ

太 五 真 掃 電 撒 五 右 梅 香 撒 電

蘇州府志





新編 御成敗式目

十二

合正の難本てよ水き少形て  
 読守むむむと一山く中ら  
 抽ひてとくくけく縁ふ形り  
 度人知ららふの山若く形り  
 自らいふ形け貸出表二階  
 常の外終て形日めくく形  
 二 流きまふ形何く結ひひらくと  
 形ひ繪吉くつめいふの  
 く中けまいつさ多形れ冊棚抹  
 者中うけくくそのけくお終  
 くめ海や表のよま形くあり

香 宜 太 五 檝 権 香 宜 太 五 檝

三  
 初とい形まお形あむつさ  
 少向の山くを寒くく其の形  
 ちくくくし形ふ形と形  
 水経よりくかい市形を形  
 形はよまゆいひと形  
 形形はよまゆいひと形  
 他名茶の自い形の形  
 水香お形子まの形の形  
 形さくの形と形と形  
 高ひる形と形と形  
 形はよまゆいひと形

権 宜 五 太 檝 五 太 檝

新編 御成敗式目

十三

蘇州府志

十三

知りし世ぬ人のつらさるる世女房  
ち中んと拵へて脱及弱ト結  
細主結系文寄小時化りき  
ととつて七つをや梅る甲斐  
日くらしぬ中うよつてお花出  
風堂堂堂堂堂堂堂堂堂堂  
傍江運山所と他へ云取あり  
好糸のゆよ見見見見見見  
板一重下を地獄の解れと  
甲子水く箱日お晴  
好ますこの月の蓮を花州

五 太 橋 五 太 橋 五 太 橋 五 太 橋

三ウ

あつたるよ形世の結途切り  
葉柿小傳るそ夕子のゆりけ  
とと者らし心只の利中  
三板の瓦雲進へ大 早都  
兼せして仕道小落の刈層  
照し香の香の持ら重ぬ古色よ  
花のよのくくくくくくくく  
賀之をちとよ隠る始る貨の  
寄る知く一は不花強う  
誇りてらつたれさるる未依  
五太橋

五 太 橋 五 太 橋 五 太 橋 五 太 橋

蘇州府志

十三



蘇州府志

空行りよと運ひて空の如く  
別ふよふのいりぬ好年  
之為に於ふ其の上結花日如  
吸くく吸く味斗一也

松 太 五 雲

予雲二十太年十九梅年十九  
永檄十八新五十八青冪三  
雲書三

賦何筮 第四

廿八日

久々心不も吸きりぬ雨花冠  
於しめりる春乃於此  
宗鑑の撰録別る其を備て  
新しきの類類見えよ其系  
西吹けの東よ初をく其石也と  
杖て刻ては片多於其業  
屯しと界るをうりもりその自  
山の突り其於よすつたり

新 五  
梅 年  
永 檄  
太 年  
予 雲  
五  
松 檄  
機

蘇州府志

十六







古の神子建強氣の御まゝと堅  
去る處を掃く年を待寺  
何事のあるを刺久は一夜のけ  
つてそをくは松を知ら  
空の如心(とそ虫拂)  
傍室中始出らうい雲  
うつらまの心よさるぬそを空  
廿日始自の森とわくのを  
樹の雲を而りり始法水出  
うかや歌の字をぬあは  
三度とも着の心と一の筆をぬ

嶋雲極太五機宜極太

三

四月廿八日 雨多  
大切なる事 ありて死なば  
極子儀本の遠平人なり  
あつては邪少ありては、後法  
流法ありしは強い吹り事  
江戸中にては海とていひ難  
小粒からしては山よりは貴  
村のまねをおおく自の能をけり  
とよ之輝くは新のまの麻  
麻衣の流しを物家と極は元  
鏡鐙の代の鏡をくまぬ

五極宜太五機極太宜極

福山千向

廿九

其陽よりきて履を脱て  
 就骨ぬりて師を九と  
 小生使の骨又隠せぬ古  
 二月結際ハ怒るも其  
 足跡ハ結何る種人  
 着心よすよみす志  
 神空ハ心性善の筆  
 在る代ハ一  
 源遠了跡来ハ如百  
 位牌ハ名也よ筆を  
 用ひる心よすよみす

五 五 五 五 五 五 五

卯又空の心  
 粟ぬるを志ひ何るも  
 都死つとハ結  
 名も其の自いよす  
 阿ハ其の結の又  
 位所使の骨又隠せぬ  
 母ハ其の骨を招く  
 ともりよすよみす  
 名者何りよすよみす  
 名よすよみす今この  
 名者何りよすよみす

五 五 五 五 五 五 五

龍山行詞

五



御書

御書

ウ  
汗かしの 鞠の結者古結久遠  
昔の 皿の 縁の 刺玉  
あまの 入らぬ ころも ちかき 想入留  
その しの 案の 望の 念性  
悉くの 足らぬ 草結結ひ中  
あまの 所へ 休む 小原木  
菩提寺の 寄附 又 身白の 野  
母屋 又 草の 飯の 湯きよ  
と あり 不足 途 こと しく 熟う 日  
持の 扇の 持て 刺 切  
是と といふ 常の 取らぬ 宝市

松 五 太 松 櫛 五 太 松 櫛

二

出づる 人の 出づる 山より 滝  
長ひの 山より 山を 懐く せす  
夏に 松の 影を 移す 蝶々  
僕も 春の 後より 子任 甚  
夕暮 松の 木 息 なく  
蝶の 舞を 吼く 犬の 鞠 也  
切な 松の 影の 影に あり 若  
まの 山を 空洞 隠す 丸 葉  
松の 影の 影の 影に あり 若  
酒の 山を 松の 影に あり 若  
松の 影の 影の 影に あり 若

青 宜 松 櫛 五 太 松 櫛 五 太 松 櫛

旅先をみ付くわふふふふふふ  
 うわのふふふふふふふふふ  
 何れに於て又ふふふふふふ  
 倉木隠しつて早を返す  
 自よふふふふふふふふふ  
 四子おろふふふふふふふ  
 二三人十をわらふふふふ  
 誠るまふふふふふふふ  
 金銀の抄紙多ふふふふふ  
 ふふふふふふふふふふ  
 代りたりふふふふふふふ

太極五宜梅機太極

三  
 唐の由へり終るる  
 空のせぬ由緒をわらふふ  
 解る何れもふふふふ  
 暮まふふふふふふふ  
 毎空雲をわらふふふ  
 急流中野をふふふふ  
 由所をわらふふふ  
 白糸の細きと時をわらふ  
 初雷より雪をわらふ  
 物突の如いふふふふ  
 法編よふふふふ

太極五宜梅機太極

龜戸千代

廿二





龍井千石

世五

のろくしと農万終極の人を以  
 めーとひとくよと終一言は  
 赤水の利のぬ砂をふまを  
 と友の好むとと渡ぬ丹心  
 物より洗ひ深しの誓の乾  
 終の踏河す於細に垢  
 下終かゝる年儲りて村時雨  
 葉のぬをふりて冬枯のこころ  
 物生を似を啜らぬる如く之  
 光の形をを稗えをや  
 重縁おねのや如の七五三

掲 太 五 宜 五 五 宜 五 五 宜

化して程終終終のら家  
 淋 其法を細りの飛ぶあり  
 翁子をちるる袖のむらた  
 唱合の音響をすぬもの  
 冬う時を六白のむきあ  
 泥ををぬ連終る故よさ  
 暮又勝のこ輝いぬを  
 幽るふに別を度し負軍  
 終多てうつす粟のぬ  
 ちりんとする助終十五日  
 白の上とをりぬき

掲 太 五 宜 五 宜 五 宜 五 宜

龍井千石

世五



附ける立笠着の四句の宿中  
 何れの筆を懸けたり  
 雲出ると茶屋のあらしの光  
 山椒一粒雷よけの囁き  
 雪を梅の深き小窓に  
 膝をぬぐぬぬ気は又兆之  
 むつ〜〜〜化城喻品を説く  
 魚とるるさうの浪は初見  
 月とてはあまを宿中のあらしの光  
 肌をぬぐする冬洗の音  
 名え元之痛癢もたをぬぐ

松香 檜 五 太 檜 香 太

一  
 雪を梅の深き小窓に  
 膝をぬぐぬぬ気は又兆之  
 むつ〜〜〜化城喻品を説く  
 魚とるるさうの浪は初見  
 月とてはあまを宿中のあらしの光  
 肌をぬぐする冬洗の音  
 名え元之痛癢もたをぬぐ

雪 檜 五 太 檜 香 太

龍  
 三  
 七

三  
 七

蘇州府志

道の道を修むる心入也

修まらずに終る事少く

大井戸の事ありて三四年

持病と云ふ事ありて

その道は修むる事ありて

借りけりて事ありて

二子 志願子の事ありて

此れ修むる事ありて

之を修むる事ありて

此れ修むる事ありて

福所の事ありて

松青

五 五 五 五 五 五 五 五

何れも修むる事ありて

強固なる事ありて

何れも修むる事ありて

修むる事ありて

之れも修むる事ありて

修むる事ありて

之れも修むる事ありて

修むる事ありて

修むる事ありて

修むる事ありて

修むる事ありて

松青

五 五 五 五 五 五 五 五

蘇州府志

蘇州府志

龍虎山

君子と云々  
酒利  
又  
大  
光  
借  
さ  
お  
白

大宜五梅檄

三ッ

近年  
た  
結納  
少  
接  
能  
七  
記  
受  
吃

檄五宜太

龍虎山

三ッ

新井三郎

むらとくを著い白ひの落むり  
源ふすく系屋石の如紀  
日記をいちとよ屋の掃物  
輝くしてをそをそをそをそ  
度會ハ重浪よするはる  
西日押つゝ寒る流 あり  
積て何る秋ハ等木の影やらん  
母も娘もま腹をさきあり  
仰る書さうとすのハ煙ら〜  
叩くも箱箱箱とさりり  
すい〜と伸起つ息の麻田

大 雲 五 妙 石 梅 檄 宜 妙 太 宅

孫長田者よ〜のむら  
舞基踏ま〜ハ口〜の如旅役  
嵐騒き如禪引 招系  
三斗搦ハ度めか〜張はて  
小大名も 供のぞら〜  
え如如如く〜名ゆる沖の自  
沙黄〜ゆりる雲を如如  
新世ハ〜と昔〜も際入〜  
招くと成身ハ密に散成  
やう〜ハ急別〜履知〜案  
か〜〜と〜ハ鮎見〜

五 悟 太 雲 宜 橋 五 石 妙 宜 檄

龍中

三十三

蘇州府志

三十一

船廠の船を初めし階出  
如多きも志とて渡り場り  
枯然とある体合れ花結春  
先從て小舟よ遊小舟の果

梅 太 檣

永檣十六太菜十四新五十六梅年十五  
予雲十五雲第一巨石二青宜十  
松場六碧池二蓬山三

二字返音 第七

花の咲き宛峰とて又空  
春の園柳葉と推紫の宿  
系能や細きたらしまよはさうらん  
つぎ合出たり事却よりり  
情まうも如きと空のまの空  
まんううとて空の空三日  
廣の嘴屋の吹竹とてうら  
廣口着道六袖の冷と知

梅年

予雲 永檣 太菜 新五 梅 空 檣

龍中并尚

三十一

御所  
御所  
御所

ウ  
とらしと海米飲のふん

嘔吐の鼻をいつまは徳病

まのふと怪をさきの物形を

軍の戸志人とおん更は

ひより言いつくまゆと名の時

一夏九旬とや五午日

桑州の何所をよめは

亦た物形に於て義理辨

野帰て先づ自れとて

ありありとつりつり

青 松 徳  
宜 場 海

五 海 撤 太 物 宜 場 五 太

二

泊て帰家出分一泊又  
泊りぬく程を客に本

草からあり幕串の物

舞臺を結成を此りふり

煙をたておる八洲の電

空を若く結成のそと

何れか懐か強ちの下

猫の毛の目か眼の

咲拵ひつじ徳家

物束の杉木立ぬる

池をたふぬる

太 松 場 五 宜 宅 撤 太 松 場 宜

龍中

三十三



千両の借り控又々未実と  
 合相御所見ハナシと縁人  
 不審申出馬々冬ハおと鏡  
 くら枝付の控候件と  
 よ心向ハ自の事と夕の宿  
 延々草の種を他より  
 幸懐懐と縁お骨玉カキカキ  
 而も笑着て借ひとり  
 足物を不三をカキ又々去々  
 笑の破目成りたる元結  
 着病の父母の事と道々  
 五 宜 雲 檝 太 梅 塙

着りの事と人々事ハ終業  
 物移り花々の事と身也  
 寒い候候し事と世の中  
 六月ハ毎日物お至る層精  
 赤心目見事と事と見事  
 熊ハ見事と事と事と  
 垣壁と事と事と事と  
 塙塙と事と事と事と  
 葉日と事と事と事と  
 礼控の事と事と事と  
 遠くハ事と事と事と  
 五 宜 雲 檝 太 梅 塙

龍山軒

三十一

萬障の夜のしつを掃かす  
 蒼鷹の独よせる暗柳  
 軸中の自利を度る七八歩  
 人に我歩へのあつて切  
 懐柔のしつを度る七八歩  
 躬銀をよほすははしり  
 こそをまてたふと産寧坂のふたて  
 舞ふるのさの節部  
 従ふおりの獅子は足散ら  
 をへ六の如くをまぬ水縁  
 掃きしそ那境のつらる 白

大宜五雲大振五機五揚五機

龍山并同

三ッ

秋風をなしく巻出さず  
 川舟のよと船頭使ははたの難  
 龍と八のつらふのよとて機口  
 十返り歌は若く有結の暗い  
 夏をふとたふすは実いなり  
 芒草ふとたふすは実いなり  
 おこてをさして怪しい事  
 若くふとたふすは実いなり  
 阿中のふとたふすは実いなり  
 米明きおつてはふとたふすは実いなり  
 多持ひしつはつらふのよとて機口

大宜五雲大振五機五揚五機

龍山并同

三二四

吉柳の取り多事神（タ）  
日初を花よりさくらら咲  
四年梅小梅種の小を初より  
五柳のとり止る可成る  
六の梅よりさくら柳の梅種  
山の初柳の梅種ハ運上り  
尾の梅よりさくら梅種  
去の梅種よりさくら梅種  
七の梅種よりさくら梅種  
八の梅種よりさくら梅種

五太梅撒五右梅宜揚平

さくらをとりさくら梅種  
石苔より梅子種の梅種  
九の梅種よりさくら梅種  
十の梅種よりさくら梅種  
十一の梅種よりさくら梅種  
十二の梅種よりさくら梅種  
十三の梅種よりさくら梅種  
十四の梅種よりさくら梅種  
十五の梅種よりさくら梅種  
十六の梅種よりさくら梅種  
十七の梅種よりさくら梅種  
十八の梅種よりさくら梅種  
十九の梅種よりさくら梅種  
二十の梅種よりさくら梅種

五梅梅太五五太太太太太

りけ鉄をひき押すまのしり  
邪子あつきの鉄を初め  
是吹堂何れか此を片修す  
名も申さるる之百子高也

松 塙 五 雲

松年十五 予雲十六 永撤十六  
太来十四 節五十五 碧海二  
松塙十二 青宜十

三字中略 第八

六月一日

此の母の夢ありてよく松う乳  
入りては山も春松山の塙  
毎性第余り海苔とて海へ送て  
冬よりふふ新の紅葉を  
初る雨の強しやとふれはも  
此の山白女細き白 松  
新跡をて尋とて海の白ふ之  
赤い先年天に滅家

松年 太来 節五 永撤 松塙 青宜 碧海

予雲

蘇州

三十九

閑情のうしろ地内と通りぬけ  
 長歌の牌の傍にぬけぬけ  
 うらららら響かす  
 うららら響かす  
 時分を度よとて  
 提提品よとて  
 空の陽をさす  
 秋の静をさす  
 補ひお葉よとて  
 名のとて  
 名の通り純子の中へ糸綴り口

梅 五 太 海 機 場 宜 空 五 太

二

暇情の波を強心  
 花の身の水を  
 人焼けぬけぬけ  
 去る衣の袂に  
 帯をよみ  
 握るの袖に  
 曲玉一つ  
 蘇の引す  
 雨伽  
 来を  
 歎

梅 宜 空 機 五 太 宜 空 機

蘇州

三十九

藤戸千鶴

三十一

兼戸四より少の松山の三人  
並つて東の松の蔭に  
善光寺様へ縁の生佛  
糸針を垂て高む  
くせいのまゝに  
松の清水の指の切さる  
松の清水の指の切さる  
錦袋糸の復りのハ  
古の松の葉の  
茶の葉の  
花の葉の

五太宜松檄

指の切さる  
くせいのまゝに  
松の清水の指の切さる  
松の清水の指の切さる  
錦袋糸の復りのハ  
古の松の葉の  
茶の葉の  
花の葉の

五太宜松檄

藤戸千鶴

三十一

新井千代

三十一

細く吹く風は涼しいものなり  
籠の煙はひらひらと立ち上り  
根の浅く佛一輪刻まじけ  
馳走のしるしを以て証  
破る所の筋をわらへて  
積り何れをよむと皆解る  
地境の編の七八年かゝり  
それ一社の果よき後派  
磐石のひらきを空に瓦形  
ゆるみ跡のしるしを相の紫  
聖なる本なるの以てしるし

柴  
五 宜 太 振 五 宜 振 五 宜 振

三

目之入社民を遊ばせり  
ひらひらと舞ひ舞ひ湯屋の蓋の  
屏風つるまを雲とあらし  
しらふをさする人なり  
船の編り何れを以て神  
舞うと知方を知りし  
夜如くやゆめを如く  
水は多し海は多し  
被岸の編りしるし  
縁のふしを以てしるし  
舞の空は乃まの煙は

五 宜 太 振 五 宜 振 五 宜 振

新井千代

三十一

龍虎山

おのゝこゝろのこゝろよりものまゝなり  
草鞋のけのこゝろのこゝろ  
のこゝろよりおのゝこゝろの引上り  
おのゝこゝろのこゝろのこゝろ  
おのゝこゝろのこゝろのこゝろ  
おのゝこゝろのこゝろのこゝろ  
おのゝこゝろのこゝろのこゝろ  
おのゝこゝろのこゝろのこゝろ  
おのゝこゝろのこゝろのこゝろ  
おのゝこゝろのこゝろのこゝろ  
おのゝこゝろのこゝろのこゝろ

梅 楸 五 太 蓮 楸 五 太 馬

おのゝこゝろのこゝろのこゝろ  
おのゝこゝろのこゝろのこゝろ  
おのゝこゝろのこゝろのこゝろ  
おのゝこゝろのこゝろのこゝろ  
おのゝこゝろのこゝろのこゝろ  
おのゝこゝろのこゝろのこゝろ  
おのゝこゝろのこゝろのこゝろ  
おのゝこゝろのこゝろのこゝろ  
おのゝこゝろのこゝろのこゝろ  
おのゝこゝろのこゝろのこゝろ  
おのゝこゝろのこゝろのこゝろ

太 楸 五 太 楸 五 太 馬

龍虎山



次ノ同子中ノ一ノ廣事家取子  
上ノ學ノ内ノ事ノ可過ノ事  
若シト下ノ飛ノ事ノ可過ノ事  
南田ノ事ノ可過ノ事

梅 機 雲 梅

予云十五梅年十七太年十四  
新五十五永操十五松梅八  
青宜九松法二柴島四  
送外一

賦 漆 何 第九

此ノ事ヲ新木ノ事ノ物操  
漆ノ事ヲ新木ノ事ノ物操  
松ノ事ヲ新木ノ事ノ物操  
予云十五梅年十七太年十四  
新五十五永操十五松梅八  
青宜九松法二柴島四  
送外一

靜 五

永 機  
松 梅  
予 雲  
太 年  
青 宜  
松 梅  
五

藤井下

胎衣梅を帯ふ家の道あり

志らしめし木山人群

脊原の紅蔭著る風の吹通

一斗梅乳を泉岳寺之

花を角の梅を子住 志入口

八百屋の生を首観去る

又りあつた終を三姑帳の家

こゝに所へる層の遍塞

志のいふと芒草持さる色

枝吹舟は不破兵衛守る

妙房の念をけ原を焼く

梅 太 宜 五 檝 五 檝 太 宜

二

昔のそとを帯るあり

を一斗の酒を帯るの瓶を人

俗檝中の帯ひよりさる

二斗の酒を帯るを結るあり

瓶の白の帯る似合ぬ

赤の帯る帯るの帯る赤白の

切目河を帯る帯る舟を

経算の帯る帯るの帯る

赤の帯る帯るの帯る

赤の帯る帯るの帯る

一斗の帯る帯るの帯る

太 宜 五 檝 五 檝 太 宜

藤井下

四三

新編

四二二

一  
引籠を子成てあつとさき  
お髪結のうまいさし  
お髪よりお髪を扇に塔の  
くしりやうー柱より  
お髪を髪結つて次は  
おのり仕上げの箱を埋る  
とらやうも沸ころの沸籠多し  
二  
お髪よりお髪を扇に塔の  
お髪よりお髪を扇に塔の  
お髪よりお髪を扇に塔の  
お髪よりお髪を扇に塔の

五 五 五 五 五 五 五

三  
お髪よりお髪を扇に塔の  
お髪よりお髪を扇に塔の  
お髪よりお髪を扇に塔の  
お髪よりお髪を扇に塔の  
お髪よりお髪を扇に塔の  
お髪よりお髪を扇に塔の  
お髪よりお髪を扇に塔の  
お髪よりお髪を扇に塔の  
お髪よりお髪を扇に塔の  
お髪よりお髪を扇に塔の

五 五 五 五 五 五 五

新編

四二二

家終りも成しす其一切をつき  
 軸カラスサテよりんてまきりけり  
 神立留世阿カラスサテり小者少留赤ら  
 中うち本立四苦前裁  
 上生告似小強子所取をおびり  
 ところ苦界の羅り釘きこ  
 所よおさすはうのそり居す係  
 地をきき出す夜の帳中の  
 世思ふも又良前と和しき此是を  
 家カラスサテの形ふよるる花車  
 無草其何又付るの控斗

揚 五 太 揚 雲 梅 檄 太 五 雲 揚

臨金形し結者小極付く  
 百源を隠すうらまの物造  
 嘸カラスサテぬいそよほの真の所  
 舞那の袖は拵ふ極角よ  
 おりそあけなるま居るがま  
 肉まきまの少を答しく居候は  
 例如き井戸城候る枯叶  
 地カラスサテ居申りよそりし揚主  
 答ふ時初よ押りけの雲  
 二階よ下の板平りう下度まき  
 喉カラスサテ新の結葉一日の花

揚 五 太 揚 雲 梅 檄 太 五 雲 揚

龍  
 中  
 行  
 約

龍  
 中  
 行  
 約

蘇州府志

四十四

こころの成るをたてて命を  
修短を機を門より引張  
たつまると日知録を以て  
福を以て命を以て命を  
或思を根生とて命を以て  
七十年に披ひたりと命を  
切ると命を以て命を以て  
何れもよと命を以て命を  
此命を以て命を以て命を  
命を以て命を以て命を

五機太極

志ありと命を以て命を  
初初命を以て命を以て  
何れもよと命を以て命を  
有命を以て命を以て命を  
是命を以て命を以て命を  
命を以て命を以て命を  
命を以て命を以て命を  
命を以て命を以て命を  
命を以て命を以て命を  
命を以て命を以て命を

五機太極

蘇州府志

四十四

湖多子濱山浦とあるは  
別子用之八入り年富  
松島中様より年々新  
山笑ふ之州とあり也

六松五

静五十五 永藏十五 松年十七  
予雲十六 右年十六 青宜七  
松嶋五 笠仙二 孝節四  
崇五三

賊人何 第十

右年

心 澄む之物松松松  
東江徐子軍中甲子  
子町田此親回一叔耕上  
何 ころのりあまきう  
酒の即堅吾子松不きり  
乾くともきき生歴の毛  
常比身が乱れり終る  
次入相藏おあるはつ

静五 予雲 松年 永藏 青宜 松嶋 空

龍山集

四十七

ウ

五十雀人の新を乞ふ  
料程中ハ新を乞ふ  
由律ハ雀人ハ雀人の  
ひとと能く此法以て  
取故ハ雀人の雀人の  
そハ雀人の雀人の  
ハ雀人の雀人の雀人の  
雀人の雀人の雀人の  
雀人の雀人の雀人の  
雀人の雀人の雀人の

選出 五  
太極 宜云 五撤 巨石 孝節

二

水口の多々  
生よりハ雀人の雀人の  
雀人の雀人の雀人の  
雀人の雀人の雀人の  
雀人の雀人の雀人の  
雀人の雀人の雀人の  
雀人の雀人の雀人の  
雀人の雀人の雀人の  
雀人の雀人の雀人の

太極 宜云 五撤 宜云 太極 悟撤

龍山集

四十七

三  
 生かぬよき世に花の散る 木刀  
 庭木にわらわらと 遊る 遊む 遊  
 灯と白の中と 白り ぬき 張る 障子  
 輛汁 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
 中々や 磁石の針の 出り 中々  
 情の 刺 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
 遠く 好人 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
 帰る ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
 泣き ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
 つれ ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
 子供 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
 紫  
 五 節 鳥 機 梅 弁 重 宜 太 五 節

三  
 白の ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
 静に ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
 了 旅 刺 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
 高に ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
 機 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
 柳 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
 浅水に ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
 数珠 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
 物 把 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
 つれ ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
 橋 五 宜 機 石 妙 五 節 鳥 宜 橋

龍  
 龍  
 龍

龍



探幽と云はれりては買舟と云  
 此處之と云はれりては買舟と云  
 若くは買舟と云はれりては買舟と云  
 嗚呼 休と云はれりては買舟と云  
 狂うけぬと云はれりては買舟と云  
 白の濁りと云はれりては買舟と云  
 之と云はれりては買舟と云  
 之を破るや 振と云はれりては買舟と云  
 之を破るや 振と云はれりては買舟と云  
 持参 買舟と云はれりては買舟と云  
 買舟と云はれりては買舟と云

梅 五 檝 太 雲 梅

三ッ  
 小休と云はれりては買舟と云  
 之を破るや 振と云はれりては買舟と云  
 持参 買舟と云はれりては買舟と云  
 買舟と云はれりては買舟と云  
 買舟と云はれりては買舟と云  
 買舟と云はれりては買舟と云  
 買舟と云はれりては買舟と云  
 買舟と云はれりては買舟と云  
 買舟と云はれりては買舟と云  
 買舟と云はれりては買舟と云

梅 五 檝 太 雲 梅

龍戸千吉

四十九

鳥籠と外舌角の自撰  
 形と呼吸の形は跡  
 鳥籠の角は遠く山の上  
 子本名佛此何より正  
 銘細上鏡を解とくら  
 湯泉の形は人ひとりの細帯  
 雷小角の付はる物小ぬけ  
 板形と字はとくちから  
 郵書とくちからぬわ修とよ  
 小春活とぬと外の体束  
 形冠り器用とすは六段面

五機節梅電五機電梅太節

七  
 鳥籠と外舌角の自撰  
 形と呼吸の形は跡  
 鳥籠の角は遠く山の上  
 子本名佛此何より正  
 銘細上鏡を解とくら  
 湯泉の形は人ひとりの細帯  
 雷小角の付はる物小ぬけ  
 板形と字はとくちから  
 郵書とくちからぬわ修とよ  
 小春活とぬと外の体束  
 形冠り器用とすは六段面

五機節太節五機太節五

龍戸千吉

五十

融るる所の叫ぶ乃のつとを  
言及くはけりて水と云  
此島の海の深きを指す  
嘯りて其の音を記す

右 檣 檣 檣

石年十三 静五十四 予空十三  
松年十三 永檣十四 青宜七  
松場七 蓬州三 巨石二  
柴島四 孝節十

披口席上

守我の貞節の甘けの時  
通すの引おせりて大其数  
孝節多より静 冥極式  
つらふりて極くも其由  
幣のあまうに伊和之地涼

永 檣  
静 五  
太 年  
予 雲  
松 年

龍舟行

龍舟

龍舟

しるまき千白の輝は舞の公  
つらきくすししれは優へ中う  
うさ程多えの運中田橋下  
文書中扇をくろる室居く水  
輝をうろくはすむ時  
七重と吹風は法身茂葉  
雲を移ふ句もあり林は雲縁  
ぬくはま心すししししし  
風の中をふり掛く舞  
林は葉舞草の噴れ口より

春湖  
等裁  
挑富  
守山  
幹雄  
吳仙  
竜法  
三子守  
松雄  
木実

神は和管外をやの成り時  
卯午 五日向味く子向極  
勢くくくく巖はゆくと  
あすすししししししし  
去極し程時をくく深雲  
うさまを根をくくく林  
大木のありは葉のめきし  
まきし葉た中のちりさの  
ゆりゆりまきしは田の如  
まきしししししししし  
水空何れは林は海はまき

号笠  
成推  
大島  
碧海  
碧平  
操一  
尚古  
眠居  
巨石  
立志  
三病

龍舟

集元二十

境内はわたりくしや風うらふ  
玉のつゝさうりさくけく白牡丹  
花のくさ色身へ醒れぬ枝多葉  
とりまぐれにふ苗よ撫さる常  
けしきん時中ふ白のけの枝  
さうりま新くくく之昔は世  
ふ代を新くけくさうりま  
扇田や末廣りくしや撫さる  
實を新く撫さるくくハ重なり  
ふ親時中や新くさうりぬか地  
又好む末は角くくくさうり

曉甫  
暮翁  
素粒  
晋江  
蓮舟  
是州  
羊山  
送風  
旭扇  
海峯  
掛燈

縁を末十完く時係ふま紅糸水  
くくさうりま新くくさうりま  
新く旭お中あまわく中く養うれ  
く扇を新く撫さるくくく  
まゆり新くさうりまのひく新時中  
先あつてぬくくくく扇のく  
五位傳ふ新くわ新く能く撫さる  
扇の新くさうりま新くく  
母の舟を新く叩くくく新く水  
ひく新くさうりま新くく  
坊く新く作ぬくくく末まの

絶吟  
暮翁  
撫子  
末中  
吐空  
如女  
研文  
燭半  
疎甫  
松嶽  
素松

龍山集

三

後の世をわくくを嘆けや塚の昔  
 弊子と云ふ天の石たぐくお難事  
 一人の強き踏しき田植の如  
 勢ひや空を突ぬくて来所  
 今白面を昔のそく冬や白探  
 水草並竹の成り水浄源  
 子木の先えくそ夏河の家持小  
 りのい難し呼ちうくあり時を  
 驚くす相の雲や夏は日  
 云なえるいり足りきり神母が  
 時とく初く終い守ぬ時とる

真香  
 坂正女  
 江波  
 其冠  
 奈生  
 若節  
 機美  
 探月  
 新和  
 市川  
 菟好

容易き事よりけりて 麓了  
 時や夕涼をそんと小持の古の

松塙  
 心義

其引

少けくは昔違ふ其の時而ふ  
 而るやの程おの友や部一公  
 多部おのい何の如や甚よ部  
 知日や世子新ある志の如州  
 その如や世とよの如くお如心  
 ひよきおよく留守の小まきり水  
 目よくは柿の赤く水樹守  
 生きたる志の如くおの先ひよ川

御免有  
 芳舎  
 翠春  
 尋春  
 紫香  
 舞悠  
 一歩  
 如川

蘇州府志

宿舎の元中...  
十洲  
古仙

子の世に...

あまの世に...

あまの世に...

あまの世に...

あまの世に...

あまの世に...

あまの世に...

あまの世に...

十洲  
古仙  
古宣  
海英  
留水  
笔高  
文雅  
未習  
茂結  
老年

去る...  
新所  
指法  
本之  
石花  
巖小  
編所  
日新  
但康  
周策  
若水  
中流

蘇州府志

...

蘭方和歌

瑞雲や海山の秋叶	一	まよ	茶
あつさりし	二	あま	楽
抑えたる	三	あま	うら
あつさりし	四	あま	精
あつさりし	五	あま	茶
あつさりし	六	あま	碩
あつさりし	七	あま	竹
あつさりし	八	あま	一
あつさりし	九	あま	山
あつさりし	十	あま	古
あつさりし	十一	あま	江
あつさりし	十二	あま	石

嘆掛し	一	あま	松
あつさりし	二	あま	徐
あつさりし	三	あま	隆
あつさりし	四	あま	甚
あつさりし	五	あま	杜
あつさりし	六	あま	松
あつさりし	七	あま	山
あつさりし	八	あま	松
あつさりし	九	あま	若
あつさりし	十	あま	梅
あつさりし	十一	あま	素
あつさりし	十二	あま	石

蘭方和歌



蘇州府志

卷二

昔少中又... 花... 山... 湯... 臨... 水... 歸... 夜... 移...

古志 琴丸 竹文 素朴 處香 不角 季縷 文雪 似水 永二 古志

昔少中又... 花... 湯... 臨... 水... 歸... 夜... 移...

一旗 梅雅 宗河 可洗 南歌 乙瓢 袋瓶 氣流 其殘 省戲 疎雨

蘇州府志

卷二

翻前中

もの新おそくはく流し夕阿の守  
行まの宿まねくゆりうと山のうへ  
若婦のうへ又新しうは給くぬ  
程遠くもあふの宿まねくゆり  
山のなまは婦をまけくはる集の  
音こてく流しきまおのる給くぬ  
新婦やあはぬまの色おぬ  
花のまをりまのまきまぬゆゆ  
ゆまのまはくまのまのまのま  
新へおまのまはくまのまのま  
昔はまのまのまのまのまのま

吟云  
竹  
杖  
浪  
杉  
水  
芳  
竹  
松  
抱

昔のまのまのまのまのまのま  
名とまのまのまのまのまのま  
音のまのまのまのまのまのま  
目のおまのまのまのまのまのま  
と新婦のまのまのまのまのま  
つる子のまのまのまのまのま  
鳴るまのまのまのまのまのま  
暮の中はまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのま  
抄のまのまのまのまのまのま

吟云  
袖  
下  
早  
松  
江  
藍  
松  
杖  
水  
山  
景

翻前中

谷 削  
 古 古  
 素 陽  
 古 曉  
 果 候  
 一 草  
 素 山  
 香 菜  
 若 庵  
 尤 儀  
 吉 狂

第 几  
 枕 了  
 静 河  
 晚 島  
 栢 宿  
 左 岳  
 栢 葉  
 第 古  
 采 檣  
 兼 旗  
 若 流

新編和歌

卷之...

おぼろ

おぼろの月夜に...  
おぼろの月夜に...  
おぼろの月夜に...  
おぼろの月夜に...  
おぼろの月夜に...  
おぼろの月夜に...  
おぼろの月夜に...  
おぼろの月夜に...  
おぼろの月夜に...  
おぼろの月夜に...

空 嶽  
琴 松  
英  
加 富  
魚 公  
栂 外  
果 熊  
南 山  
凡 子  
子 々  
無 能

おぼろの月夜に...  
おぼろの月夜に...  
おぼろの月夜に...  
おぼろの月夜に...  
おぼろの月夜に...  
おぼろの月夜に...  
おぼろの月夜に...  
おぼろの月夜に...  
おぼろの月夜に...  
おぼろの月夜に...

杜 峰  
之 西  
け 々  
熊 溪  
石 眞  
似 榮  
空 鳥  
在 葉  
百 可  
可 堂  
有 之

清ひ葉のすくらるる水く水  
空の河くく丁の中の水如雲の空

蕙 前  
涼 坪

妙句とあそぶふりり花梅の花

九

花 鶴

川舟や葉の吹くまをんをててく  
水りさく山みたりや秋の風

松 外  
松 結

昔年の下向とす

う白の雪やまきりて夏あぢ

こ 代

清き青く何くうくゆき夕ま

層 津

宙去るの年をくくあまきり相一葉

石 庭

ひと解はまあふ花すのまきりれ

石 翁

袖の雪やまきりて夏あぢ

雪 夕

空里花まのまきりて夏あぢ

末 涼

空人如心まのまきりて夏あぢ

水 氷

人向のぬきりて夏あぢ

猿 目

左の鳥渡のうくくゆき

芳 芳

花梅や海山越くくゆき

曙 空

梅の鳥如まきりて夏あぢ

北 島

水くくゆき

雪 山

梅の鳥如まきりて夏あぢ

畦 丈

梅の鳥如まきりて夏あぢ

雪 山

梅の鳥如まきりて夏あぢ

雪 山

花の影のまゝに 船を走らむ日如く  
松の葉のまゝに 舟を走らむ日如く  
舟の影のまゝに 舟を走らむ日如く  
舟の影のまゝに 舟を走らむ日如く  
舟の影のまゝに 舟を走らむ日如く  
舟の影のまゝに 舟を走らむ日如く  
舟の影のまゝに 舟を走らむ日如く  
舟の影のまゝに 舟を走らむ日如く  
舟の影のまゝに 舟を走らむ日如く  
舟の影のまゝに 舟を走らむ日如く

孤月 松葉 舟影 舟影 舟影 舟影 舟影 舟影 舟影 舟影

花の影のまゝに 船を走らむ日如く  
松の葉のまゝに 舟を走らむ日如く  
舟の影のまゝに 舟を走らむ日如く  
舟の影のまゝに 舟を走らむ日如く  
舟の影のまゝに 舟を走らむ日如く  
舟の影のまゝに 舟を走らむ日如く  
舟の影のまゝに 舟を走らむ日如く  
舟の影のまゝに 舟を走らむ日如く  
舟の影のまゝに 舟を走らむ日如く  
舟の影のまゝに 舟を走らむ日如く

松水 松葉 舟影 舟影 舟影 舟影 舟影 舟影 舟影 舟影

舟の影のまゝに

舟の影のまゝに

九まゝに取く相ねやこゝろは、以  
 び、ふちまゝと、か秋の、を  
 冬、籠ふゆをむきある、後、若、  
 ら、葉、つ、本、浄、く、す、ま、く、あ、ま、  
 ぐ、つ、掃、や、さ、う、一、葉、中、の、村、母、の、め  
 本、一、一、や、柳、田、の、水、を、あ、る、音  
 大、柿、女、下、ま、く、暑、中、日、之、り、  
 時、を、道、一、一、一、備、く、住、ぬ、く、  
 暁、雨  
 新、甫  
 中、山  
 古、梁  
 玉、了  
 暁、芦

暁未初冬

跋

又、所、の、段、字、順、宗、徳、紹、永、三、所、に、  
 多、句、心、教、修、却、の、苦、中、を、あ、る、  
 五、七、日、あ、る、二、三、句、に、能、を、柳、加、  
 と、め、一、二、遊、む、あ、る、む、の、五、吟、  
 半、途、中、一、の、の、を、許、す、  
 一、を、玉、あ、り、し、を、お、り、我、の、  
 心、を、持、む、に、信、吉、千、句、に、  
 ち、ね、ま、す、あ、る、一、又、柳、女、  
 暁、未、初、冬

此書は 吾國船政の歴史を  
 時ととらへて 追々 述べてゆく

明治十六年仲夏

八月廿五日 廣梅年

男史中書

○其角堂編輯書目

吳々細道 其角翁 一冊 俳諧みづな草 二冊

俳諧繪入八巻 自筆 四冊 同 日又左巻 二冊

發句五百題 四冊 同 摺歩行 一冊

明治十六年十一月九日出板 御届同十二月出板

編輯兼 出版人 晉 永機

南葛飾郡小梅村六十四番地

發賣人 杏寄半造

浅州區須賀町十九番地



